SPORTS　FOR　ALL　～　スポーツは健康な人のためだけでなく、すべての人に　～

Monthly Report

SENDAI UNIV.
PUBLIC RELATIONS
Vol.191　/　2022 .MAR
（月1回発行）

620名の学生が新たな一歩/令和3年度卒業式を挙行

高橋学長より卒業証書・学位記を受け取る体育学科総代の石森さん

「令和3年度第52回卒業証書・学位記授与式並びに第23回大学院学位記授与式」は3月12日（土）、本学第5体育館で行われ、体育学部601名（うち、体育学科311名、健康福祉学科101名、運動栄養学科77名、スポーツ情報マスメディア学科36名、現代武道学科31名、子ども運動教育学科45名）及びダブルディグリー制3名、並びに大学院16名が本学を巣立ちました。

表彰関係では理事長特別賞に、令和3年10月に行われた体操・世界選手権「種目別ゆか」で銀メダルを獲得した体操競技部の南一輝さん（体育4年）が輝き、学長賞に第47回全日本大学選手権大会で男子総合優勝やエイトで日本一を掴んだ漕艇部の学生や令和3年度第67回全日本学生ウエイトリフティング個人選手権大会のトータルで優勝した遠藤朱李さんなど15名が表彰されました。
式はコロナウイルス感染拡大防止のため、式次第を簡略し、学生と関係教職員のみで執り行いました。

LIVE配信された卒業式の様子はYouTube仙台大学公式チャンネル（下記のQRコード）よりご覧いただけます。

<学長式辞要旨・髙橋 仁>

皆さんにとってこの2年間は、新型コロナウイルスの世界的な流行により、それ以前とはまったく異なる学生生活を送ることになりました。体育、スポーツ、健康科学という身体活動を専攻領域とする本学にとって重要な意味をもつさまざまな活動に制限がかかり、授業は全面的に遠隔で行い、部活動も断続的に休止となり、大会等の中止も相次ぎました。

〈 目　次 〉

・620名の学生が新たな一歩/令和3年度卒業式を挙行	1・2
・宮城教育大学と連携協定を締結しました ・仙南地域体育協会連絡協議会第2回研修会並びに表彰式に髙橋学長が参加	3
・ 髙橋仁学長がUNIVASシンポジウムに登壇 ・挑戦する心と感謝	4
・スポーツ栄養研究会認定証授与式 ・健康づくり運動サポーター認定証書授与式 ・令和3年度仙台大学履修証明プログラム「乳幼児運動あそび指導者育成プログラム」を修了	5
・<SUオフィスより高大接続教育実施報告> 3月9日（水）健康福祉学科×仙台大学附属明成高校食文化創志科 3月10日（木）子ども運動教育学科学科×仙台大学附属明成高校食文化創志科	6・7
・学生が日本バドミントン学会で多数発表	8
・学生が東京体育学会第13回学会大会にオンラインで参加 ・「高校スポーツの安全を守る」Vol.47	9
・芝草通信　NO. 35	10・11
・退職される先生方からメッセージをお寄せ頂きました	12・13

学生の活躍や、取り組みなどをご存知でしたら広報課までお寄せください。
Monthly Reportで紹介する他、報道機関にも旬な話題を提供して参ります。
本誌へのご意見・ご質問等がありましたら広報課までご一報ください。

仙台大学 広報課
直通　0224 - 55 - 1802
Email kouhou@sendai-u.ac.jp

徐々に対面授業が再開されたものの不自由な生活を強いられる毎日でしたが、学生の皆さんの協力と一人一人の創意工夫によって部活動等を継続することができ、女子サッカー部がインカレで初のベスト8、硬式野球部が秋の神宮大会に初出場を果たすなど、大きな成果をあげる事ができました。また、昨年１２月に学友会主催で打ち上げた花火は、学生の皆さんのみならず町の人々にも元気を与えるイベントとなりました。

1年延期となった東京オリンピック・パラリンピックも昨年の夏に開催され、本学の卒業生が活躍するとともに現役の学生の皆さんも聖火リレーのボランティアや大会運営のスタッフなどとして参画し、スポーツを「する」「みる」「ささえる」という本学の特色を発揮することができました。特に、体操競技部の南一輝選手は、ケガのため東京オリンピック出場は叶いませんでしたが、その悔しさをばねにして12月に開催された世界体操選手権では見事銀メダルを獲得しました。ケガをのりこえて世界の頂点を目指し努力し続けたことを大いに称えたいと思います。

コロナ禍により、思い描いていた学生生活を送ることができなかったという気持ちを持つ皆さんも多いことと思います。しかし、困難を乗り越えて今日の日を迎えた事は、今後の人生の糧となるに違いありません。

皆さんは、これから、社会のさまざまな分野で、新たな一歩を踏み出すことになります。世界は今、激動の時を迎え、日本も大きな変化のうねりの中にいます。誰もが安心してスポーツを楽しむことができる平和な社会を築いていくために、「実学と創意工夫」の建学の精神そして「スポーツ・フォア・オール」の理念のもと、皆さんが本学で学んだ全ての事を土台として、それぞれの場所で存分にその力を発揮されることを期待しています。

＜謝辞要旨・熊谷 のぞみ（子ども運動教育4年）＞

私は4年間の中で、諸先生方や友人だけではなく、保育実習やボランティアを通して、多くの子どもたちに出会いました。初めての保育実習では不安や戸惑いから失敗も多くありました。しかし、大学での学びや共に実習を行っていた仲間との励まし合い、指導教諭の先生の熱心なご指導、そして子どもたちが見せる屈託のない笑顔で乗り越えることができ、大きく成長することができました。

令和2年3月に新型コロナウイルス感染症が流行し始め、私たちの大学生活も一変しました。活動の自粛や講義がオンラインとなり、先の見えない毎日で焦燥感に駆られることこともありました。しかしこれらの経験が、子どもたちと関わることの楽しさを改めて認識するきっかけとなりました。自分の目標や夢を達成するため、先生方から、きめ細やかなご指導を受け、基礎的な面から応用力まで学ぶことができました。このような恵まれた環境の下で充実した大学生活を送ることができたことをとても嬉しく思っております。

本日をもって私たちは仙台大学を卒業します。春から進む道はそれぞれ異なりますが、仙台大学で培った知識や技術、精神を活かして、卒業生一同精進して参りたいと思います。楽しいことや嬉しいことばかりではなく、悩むことも多くあると思います。そのときには、仙台大学で仲間たちと過ごした時間や応援してくださった先生方を思い浮かべて、一歩ずつ前に進んでいきたいと思います。そして、私たちが充実した学生生活を送り、今日この日を迎えることができたのは、他ならぬ家族の支えがあったからこそだと思います。どんなときでも一番近くで応援してくれた家族の存在が励みになりました。心から感謝しています。ありがとうございます。

宮城教育大学と連携協定を締結

本学は3月24日（木）に宮城教育大学と「今後の学校教育の創造等を担う教員の養成・輩出に向けた共創、連携に関する協定」を締結しました。

この協定は両大学の教員養成に係る教育研究実績を高めるうえで有益と見込まれる共創、連携の取組を推進することにより、今後の東北地方をはじめとする各地域の学校教育の創造、円滑な実施を担うことができる教員を多数育成、輩出し、もって地域社会の創生、Society5.0に向けた学校教育の発展に寄与することを目的としています。

協定式は本学LC棟で行われ、宮城教育大学の村松隆学長は「学部教育や大学経営、人事交流等においても共同・共創関係を結び、共に力を出し合って地域に貢献する人材の養成とその高度化を図っていきたい」と挨拶し、次いで本学の髙橋仁学長が「これまでも多くの教員養成の実績とノウハウを持っている宮城教育大学との協定により、本学の学生にとって貴重な学修の機会が得られることに感謝しています」と本協定に期待を寄せました。

今後は教員養成に関する共同研究や学生の交流、両大学と地域との連携・交流等を行っていく予定です。

仙南地域体育協会連絡協議会第2回研修会並びに表彰式に髙橋学長が参加

研修会を主催した仙南地域体育協会連絡協議会から以下のようなご報告を頂きました。

令和4年3月13日（日）角田駅コミュニティプラザ2階イベントホールで、仙南地域2市7町の体育協会やスポーツ少年団等の関係者43名を対象にした研修会並びに表彰式を開催しました。

表彰式では宮城県スポーツ協会より、スポーツ振興に多大な功績を残した方に与えられる功労章を授与された2名が表彰され、記念品が贈られました。

研修会では、仙台大学学長 髙橋 仁 氏をお招きし「仙南地域におけるスポーツ活性化に向けて」と題した講演を行っていただきました。

はじめに髙橋氏のスポーツ歴、指導歴を通して得た考えを伺いながら、仙台大学の取り組みである中学校部活動支援やスポーツを通した地域への貢献、さらにはスポーツ活性化支援コンソーシアム事業を紹介していただき、今後の地域スポーツの活性化のために必要な取り組みや、問題点をご教授いただきました。

講演の質疑応答ではそれぞれの市町が抱える問題や取り組みに所見をいただき、今後の仙台大学との連携についても意見を交え、有意義な研修会にすることができました。

今後も本協議会では、仙南地域のスポーツ活性化に向けて幅広く情報共有や意見交換に取り組んでいきます。

＜報告＞

角田市地域振興公社 スポーツ振興係 主事　八巻　太成

角田市地域振興公社 スポーツ振興係 スポーツ事業推進員　納　寛大(本学OB)

髙橋仁学長がUNIVASシンポジウムに登壇

3月22日（火）、一般社団法人大学スポーツ協会（UNIVAS）が主催するシンポジウム「UNIVAS Athletics & Sport Design Symposium 2022～日本の大学スポーツのデザインが変わる」がオンライン開催され、第二部の対談に髙橋仁学長がパネリストとして登壇しました。

対談では、株式会社湘南ベルマーレ代表取締役社長水谷尚人氏、studio-L代表山崎亮氏とともに「大学スポーツの新時代をデザインする」をテーマに各々の立場から、大学スポーツと地域の関連性についての取組みを語り合いました。髙橋学長からは、本学の学生が中高校生の運動部活動に対して指導している事例などをはじめ数々の地域の取組みについて写真を使いながら紹介しました。

このシンポジウムはUNIVASオフィシャルサイトにてアーカイブ配信を行っています。

※なお、髙橋学長は3月16日に発生した福島県沖地震の影響による東北新幹線不通により、登壇形式をオンラインに変更いたしました。

初寄稿シリーズ

挑戦する心と感謝

助手　　金藏　弘佳（2021年4月　着任）

昨年4月より仙台大学でアスレティックトレーナーとして勤務しております金藏弘佳です。私は以前アメリカのハワイ大学でアスレティックトレーナーとして働いていました。その時、仙台大学の学生がアスレティックトレーナー研修でハワイ大学に来ていたのが初めて交流を持った場でした。この度、仙台大学に来られたのも不思議なご縁を感じています。

そもそもアスレティックトレーナーとは何者なのかご存じない方のために簡単に説明しますと、よく野球やサッカーなどのテレビ中継で見かける光景ですが、選手が怪我をしてフィールドに倒れ込んだ時に駆け寄って応急処置などをしているのがアスレティックトレーナーです。アメリカでは米国医師会によって準医療従事者に認定されている国家資格で、傷害・疾病の予防、リハビリ、臨床評価と診断、緊急対応など、医師と連携して様々な現場で治療またはサービスを提供しています。

仙台大学に勤務する以前は10年程アメリカで生活していました。その間シアトル、オレゴン、ハワイ、ボストン、サンフランシスコと様々な都市で生活し、そして高校、大学、プロスポーツチームなどのスポーツ現場で経験を積んで来ました。アメリカに留学した直後は、全く英語が話せなかったということもあり、その異なる言語や文化の違う国で生き残っていけるのかと感じざるを得ませんでした。しかしアメリカでアスレティックトレーナーになるんだという強い想いを持つことで、数々の苦境もなんとか乗り越え気づけば10年もアメリカで生活できた気がします。

アメリカで過ごした経験から私が学んだことは、必ず成し遂げるという強い気持ちとそれに対する惜しまぬ努力、そして周りの方々のサポートを得ることが出来れば自分の夢や目標は達成することが出来るという事です。今こうして自分がなりたかったアスレティックトレーナーとして働くことができているのも、いろいろな方々に助けられ支えてもらったからに他なりません。

仙台大学の学生たちが安心してスポーツに打ち込める環境づくりを整えていくとともに、夢や目標を持つことの大切さを伝え、挑戦していけるよう全力でサポートしていきたいと思います。

スポーツ栄養研究会認定証授与式

3月11日（金）「2021年度 運動栄養学科 スポーツ栄養研究会 認定証授与式」が挙行され、髙橋仁学長より認定証書が授与されました。
今回は、密を避けるため、優秀認定8名、優良認定2名、および全国のNR・サプリメントアドバイザー合格者の中でも、日本臨床栄養協会が定める成績優秀者表彰対象者2名のみが出席対象者となりました。対象者計12名のうち10名が出席しました。

スポーツ栄養分野における学科生の多様な取り組みを推進するスポーツ栄養研究会が定める四つの部門、「アスリート部門（スポーツ栄養セルフマネジメント認定）」「研究部門（スポーツ栄養研究活動認定）」「サポート部門（スポーツ栄養サポート活動認定）」「キャリア部門（スポーツ栄養キャリア認定）」それぞれの部門認定において、2部門以上の認定またはキャリア部門で栄養士免許を含む3種類以上の該当免許・資格の取得または見込み、かつ栄養士実力認定試験A判定の学生が優秀認定となりました。

また、1部門の認定かつ栄養士実力認定試験A判定の学生は優良認定となりました。

鈴木彩菜さん（優秀認定：青森山田高校出身）は、アスリート部門、研究部門、キャリア部門の三つの部門で認定を受け、NR・サプリメントアドバイザー合格（合格者の中でも協会より成績優秀表彰）、CSCS（NSCA）合格、栄養士免許取得の成果を収めました。
國分恵理さん（優秀認定：宮城県立塩釜高校出身）は、研究部門、キャリア部門で認定を受け、NR・サプリメントアドバイザー合格（成績優秀者表彰）、健康運動指導士受験資格取得、栄養士免許取得の成果を収めました。

佐藤大也さん（優秀認定：秋田県立本荘高校出身）は、アスリート部門に関連して、漕艇部主将として全日本大学選手権男子総合二連覇に貢献しました。
授与の際、髙橋仁学長より、コロナ禍で大変な状況の中でも、それぞれに努力し抜いた学生の皆さんへ最大の賛辞が贈られました。
＜運動栄養学科＞

健康づくり運動サポーター認定証書授与式

3月11日(金)に健康づくり運動サポーターの認定証書授与式を挙行しました。

今年度は資格認定評価会で認定された初級22名(出席12名)に対して認定証書が授与されました。今回の認定者を含めこれまで延べ636名が本資格を取得してきました。

髙橋仁学長から「養成講座や現場実習で学んだことを今後の学生生活や社会で活かしてほしい」小池和幸教授からは「初級よりも上の資格(中級・上級)取得を目指し取り組んでほしい」と学生にエールを送りました。 初級を取得した加賀千咲さん(運動栄養3年)は「将来は運動指導のスキルを身に付けたスポーツ栄養士を目指し、健康運動指導士取得に向けこの経験を活かしたい」、小幡春菜さん(健康福祉2年)は「養成カリキュラムを通して、運動指導法やコミュニケーションスキルについて学び、今後の学生生活で活かしたい」と抱負を述べました。
＜健康づくり支援班＞

令和3年度仙台大学履修証明プログラム「乳幼児運動あそび指導者育成プログラム」を修了

3月20日、令和3年度仙台大学履修証明プログラム「乳幼児運動あそび指導者育成プログラム」を修了しました。

修了式では、昨年の10月以降、約半年間のプログラムを履修した11名の履修生に対し「履修証明書」が授与されました。授与後、一人一人が本プログラムを受講した感想等を述べた後、プログラムコーディネーターの原田健次教授（子ども運動教育学科長）より「本プログラムで学んだことを実践に活かすとともに各職場内で新しい意見を取り入れ、各自の課題に挑戦してほしい」と挨拶しました。

修了生11名の皆さん、今後のご活躍を期待します。

＜SUオフィスより高大接続教育実施報告＞
3月9日（水）健康福祉学科×仙台大学附属明成高校食文化創志科

仙台大学

仙台大学
健康福祉学科 × 食 × 仙台大学附属明成高校
食文化創志科

明成

“食”でつながる横断的な教育

実施概要

開催日時：2022年3月9日（水）10：55～11：45　11：55～12：45
開催場所：仙台大学附属明成高校
（創志レクチャールーム/食文化実践RLB1/食文化RLB2）
タイトル：いつまでも「食事」を楽しむ
対象者　：仙台大学附属明成高校　食文化創志科2年生（90名）
対応者　：仙台大学教員（大山教授・後藤准教授・福田講師・堀江准教授）

	1グループ　食文化実践RLB1	2グループ　食文化実践RLB2	3グループ　食文化実践RLB2
10：55～11：00	○開催の挨拶 ○概要の説明		
11：00～11：25	○講義（全体） ・食事と介護の関係性 ・嚥下とは何か。嚥下に必要な機能（口腔・嚥下機能） ・機能が低下した状態と疾患 ・高齢者に必要な食事と栄養		
11：30～11：50	嚥下体操の実践	介護食の試食会	飲料にトロミをつけよう
11：50～12：10	飲料にトロミをつけよう	嚥下体操の実践	介護食の試食会
12：10～12：30	介護食の試食会	飲料にトロミをつけよう	嚥下体操の実践
12：30～12：40	○まとめ（全体） ・高齢者がいつまでも元気に食べられるために必要なことは？ ・仙台大学YouTubeの制作		

記録写真

「調理×介護福祉」

「食」は人の生きがいであり、人の心を豊かさにすることができる。
介護福祉分野で「食」の専門家として活躍しよう。

当日の資料

まとめ

今回の高大接続授業は、学科を横断的に繋いだ新しい取り組みが実現されました。
縦の繋がりではなく、横断的に「食文化創志科×健康福祉学科」がタックを組み“食”を軸として授業が行われました。高齢者に食事を提供する裏側には、盛り付け方や作り方など様々な工夫があります。誰しもが不自由なく食事できるわけではないのです。
食の専門家として広い視野を持ち、将来の道を切り開いていけるように今後益々の先進的な高大接続7年間一貫教育を行います。

＜高大接続教育実施報告＞
3月10日（木）子ども運動教育学科学科×仙台大学附属明成高校食文化創志科

仙台大学
子ども運動教育学科

✖

仙台大学附属明成高校
食文化創志科

実施概要

日　　時：令和4年3月10日（木）
場　　所：食文化実践RLB1
タイトル：遊んでぼくらは人間になる
特別講師：仙台大学教授　賞雅さや子先生
参加者　：食文化創志科2年生（90名）

授業内容

（1）保育教育の仕組みの説明
（2）保育免許について（資格等）
（3）施設の仕組みについて
（4）子どもの遊びについて
（5）まとめ

授業の様子

・味わう　・動く
・触れる　・話す
・探索する　・見る
・感じる　・聞く
・創造する　・においをかぐ

→ あそびにはこうした活動がすべて含まれます。終わりも始まりもない、大人への土台作りがあそび、あそぶことです。

子どもの可能性を最大限に引き出そう！

遊ぶから、子どもは成長できる

子どもたちにとって遊びとは・・・？
「好きなこと」「やりたいこと」「夢中になること」
子どもの関心はどこにあるかわからない。
多方面から子ども一人一人にアプローチすることが保育には重要である。

「あそび」は子どもの「やってみたい」から始まる

あそびは、子どもの「やってみたい」という気持ちからスタートするものであって、決して「やりなさい」と命じられてするものではありません。遊びは、自発的なこと。

今後の取組みについて

今回の特別授業は、“子ども”を理解することからスタートしました。どこに興味を示すかわからない好奇心旺盛な子どもたちに対してどんな食事を提供し、どんな食育につなげるか。を今後シリーズ化し授業を展開していきます。

学生が日本バドミントン学会で多数発表

3月6日（日）に日本バドミントン学会第5回大会がオンラインにて開催され、林直樹准教授（バドミントン部監督）と同研究室のゼミ生7名、バドミントン部アナリスト2名が学会発表を行いました。

午前中のシンポジウムでは林直樹准教授が登壇し、バドミントンのゲーム分析について発表を行い、午後の学生セッションにおいては、各々が発表を行いました。

学生セッションは全部で13演題ありましたが、そのうち9題を本学の学生が占めました。

同研究室では3年次にグループ研究をポスター発表、4年次に卒業論文を口頭発表しており、研究の成果を世に広く報告することを目的としています。

発表後に「卒業論文提出後も発表の準備できつかったし、今日も緊張したけれど、やりきれて良かった」「社会人になって営業として働くので、プレゼンで培ったことを活かせるようにこれからもがんばっていく」などの感想がありました。

部活動だけでなく研究を含めた学修においても、大学生活の『完走』を実感した歓喜にあふれた学会となりました。

発表者と演題は以下の通りです。

塩沼直希（体育4年）
『バドミントン・スマッシュにおけるシャトル速度と角速度の関係性』

舘田悠汰（体育4年）
『バドミントン・男子シングルスにおいてゲーム終盤にスマッシュを打つことの有効性』

山口将史（体育4年）
『バドミントン競技・男子シングルスにおいてのスマッシュの重要性』

本間雄大（体育4年）
『バドミントン競技におけるハイバックハンドストロークに関する研究』

武藤大地（体育4年）
『バドミントン・男子シングルスにおけるスマッシュエースまでの時系列パターンの 分析』

玉手郁奈（体育4年）
『バドミントン競技の混合ダブルスにおける男女のラリー参加からみた勝者−敗者間の比較』

前田陽向（体育4年）
『バドミントン・オーバーヘッドストロークにおける「ゼロポジション角度」と 競技歴の関係』

須田翔大（スポーツ情報マスメディア3年）
『バドミントン競技のリアコートにおけるフォア側とバック側のスタッツ比較』

佐藤美咲（スポーツ情報マスメディア2年）
『バドミントン・女子シングルスにおけるロングサービスに対する返球の分析』

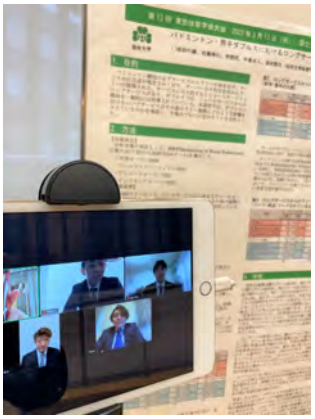
学生が東京体育学会第13回学会大会にオンラインで参加

3月13日、国士舘大学世田谷キャンパスにて東京体育学会第13回学会大会が行われました。先週の日本バドミントン学会に続き、林直樹研究室の3年生8名がポスター発表を行いました。最近では珍しく対面での開催となった学会でしたが、東京都が蔓延防止等重点措置地域であったため、学生の現地参加は断念し、Zoomにて繋いでポスター前での「責任着座」という形をとりました。本来であれば会場にて直接触れ合いご指導いただくのが一番ですが、Zoomでも多くの先生方が対応してくださり、質問やアドバイスをいただくことができました。

発表後に「他の大学の先生にアドバイスをいただけたことに感動した」「研究デザインの勉強になった」などの感想があった反面「この一連の作業を来年度は一人でやるのか」「早めに取り組まないと間に合わない」などの不安も同時に述べていました。

今回は8名のゼミ生を「バドミントングループ」と「共生グループ」に分けて、研究活動を行いました。「共生」とは学習指導要領においてもキーワードとなっているもので、広く「人と人」「人と自然」「国と国」というような「関係性」について学際的に考えていく分野として設定しています。今回は「東日本大震災に関連する共生」について考えましたが、今般の「戦争」についても議論していけるような形にできればと思います。

発表者と演題は以下のとおりです。



成田行磯、伴野匠（体育3年）、
佐藤倖心、中島光人（健康福祉3年）、
須田翔大（スポーツ情報マスメディア3年）
「バドミントン・男子ダブルスにおけるロングサービスの有効性」

大橋美紅、福士廉、谷津宏輝（体育3年）
「東日本大震災発災以降の公園の利用に関する考察」

川平キャンパスAT・S&Cレポート

「高校スポーツの安全を守る」Vol.47

助手　高野 順平

今年の2月から川平ATルームでアスレティックトレーナーとして勤務し、普段は川平ATルームで仙台大学附属明成高校のアスリートのサポートをしております。私は、アメリカの大学でアスレティックトレーニングのカリキュラムを終了し、全米アスレティックトレーナーズ協会認定トレーナーの資格を取得した後、アメリカの大学で勤務しておりました。日本に帰国後はプロスポーツや病院などで勤務し、日米でのアスレティックトレーニングの違いやスポーツを取り巻く環境やシステムの違いなど、良い点・悪い点と色々感じるところがありました。アメリカでは大学だけでなく、多くの高校でも常勤のアスレティックトレーナーがおり、怪我の予防・評価・リハビリなど、学生アスリートのサポートをしております。スポーツでの怪我を100%予防することは難しいですが、学校は学生たちに少しでも安全な環境を提供しようと努力しているのではないでしょうか。日本でもアメリカと同じように学生スポーツは盛んですが、残念ながら安全な環境作りという点では、まだまだ課題は多いと思います。しかし、仙台大学附属明成高校には、高校レベルで複数のアスレティックトレーナーが常駐している、日本ではかなり稀な環境があります。この環境で今まで経験してきたことを活かし、日本のスポーツの環境、また、高校スポーツの環境にあったアスレティックトレーニング活動を目指し、学生たちのサポートをしていきたいと思います。また、私は国内外で色々な所に住んだ経験があるのですが、東北に来るのは今回が初めてで、新しい職場環境だけでなく生活環境にも早くなじめるよう頑張っていきたいと思います。よろしくお願い致します。

芝草通信　NO. 35

担当：体育施設管理ｺﾝｻﾙﾀﾝﾄ　小島　文雄
施設管理課 労務職員　八巻　良宏

第二グラウンド芝生（暖地型・寒地型芝生）に肥料追加散布実験の状況

寒地型芝生、ペレニアルライグラスとトールフェスクに対して化成肥料カントリーホスカとネオターフを追加散布して効果を観察し、実験区C-２と実験区C-３を掲載しました。

写真 1. 試験区Ｃ全体、　寒地型芝草区域
北側（左）：ペレニアルライグラス、
南側（右）：トールフェスク

試験区　C
肥料追加散布
実験区：C−1 化成肥料（カントリーホスカ 36g/m2）
実験区：C−2 化成肥料（ネオターフ 36g/m2）
寒地型芝生：　左側、ペレニアルライグラス
実験区：C−3 化成肥料（カントリーホスカ 36g/m2）
実験区：C−4 化成肥料（ネオターフ 36g/m2）
寒地型芝生：　右側、トールフェスク

実験区 C−1、カントリーホスカ ライグラス	実験区 C−3、カントリーホスカ トールフェスク
実験区 C−2、ネオターフ ライグラス	実験区 C−4、ネオターフ トールフェスク

図 1. 試験区Ｃの説明、肥料散布
東側（上）：カントリーホスカ、
西側（下）：ネオターフ

写真 2. 実験区 C-2　　近景　（散布直後）
散布肥料：ネオターフ
寒地型芝生：ペレニアルライグラス

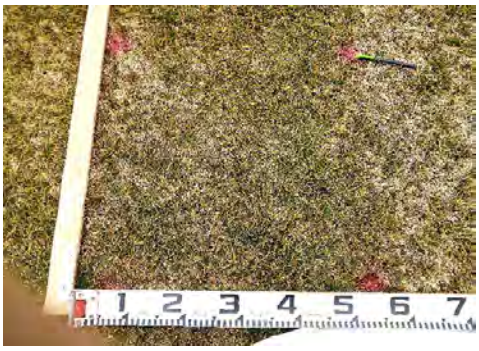


写真 ３. 実験区 C-2、　　近景　（3か月後）
散布肥料：ネオターフ
寒地型芝生：ペレニアルライグラス

写真 ４. 実験区 C-2　　接写　（散布直後）
散布肥料：ネオターフ
寒地型芝生：ペレニアルライグラス

写真 ５. 実験区 C-2　　接写　（3か月後）
散布肥料：ネオターフ
寒地型芝生：ペレニアルライグラス

ラグビー・アメリカンフットボール場の寒地型芝生はラグビーポールの南側（写真の右側）を境に北側にペレニアルライグラスを南側にトールフェスクを播種して育成している。その境界を跨いで、赤印のマークを中心にして1m四方の試験区 Cを4分割して、図 1の通りの組み合わせで緩効性チッソ肥料を散布し観察しました。
ネオターフはチッソ、リンサン、カリ、クドの含有率は１２－６－８－２でバランスよい内容で、微生物でゆっくり分解し、また肥料焼けが発生しにくい緩効性肥料です。
カントリーホスカはチッソ、リンサン、カリ、クドの含有率は１０－５－８－５で水に溶けにくく、化学分解あるいは微生物分解を受けて、ゆっくりと少しずつ溶ける緩効性肥料です。
両方とも似通った性質です。今回は写真の精度が低く比較が困難ですが現地で実際を観察すると様子が分かります。
今後の課題として数回実験を繰り返して、散布時期の環境（温度、地温、水分量、経過時間など）を把握して効率良い散布を研究することです。

写真 ６．実験区 C-３　　近景　（散布直後）
散布肥料：カントリーホスカ
寒地型芝生：トールフェスク

写真 ７．実験区 C-３　　近景　（3か月後）
散布肥料：カントリーホスカ
寒地型芝生：トールフェスク

写真 ８．実験区 C-３　　接写　（散布直後）
散布肥料：カントリーホスカ
寒地型芝生：トールフェスク

写真 ９．実験区 C-３　　接写　（3か月後）
散布肥料：カントリーホスカ
寒地型芝生：トールフェスク

（R4．3．21．　記）

退職される先生方からメッセージをお寄せ頂きました

今年度で退職される先生方から本学教職員や学生へむけて想いの込もったメッセージをお寄せいただきましたのでご紹介します。

教職員・学生・すべての関係者に感謝

教授　鈴木　省三

今から41年前の昭和56年、26歳の年、北海道の王子製紙（株）を退職し、仙台大学に入学しました。母校で学び・育てられそして生かされ、無事定年退職を迎えられたことを大変嬉しく思っております。
今日までご指導いただきました関係各位、ともに切磋琢磨して大学づくりに邁進した教職員・学生の皆様に深く感謝申し上げます。ありがとうございました。
特に私の研究・教育・社会貢献活動の礎を築いて下さいました恩師の佐藤佑教授（運動生理学）、私の生涯の研究テーマで「狙った大会で最高のパフォーマンスを発揮するプログラムデザイン」の理論と実践を海外留学中にご指導いただいたDavid smith教授（カナダ・カルガリー大学）、さらにその理論を用いて実践・応用し、成果を上げたスポーツ現場の実践例を博士論文「Program design based on a mathematical model using rating of perceived exertion for an elite Japanese sprinter」の完成まで、特に数理モデルの計算式作成の理論と実践をご指導いただいた東北学院大学人間情報学生命情報領域の高橋彌穂教授、ボブスレー・スケルトンのオリンピックJuryとして15年間、世界選手権・3度のオリンピックを通してスポーツのフェアプレー・規範・敬意・仲間との友情等「スポーツの価値」と社会貢献活動についてご指導いただいたUeli Geissbuehler氏（スイス）の教えは、私の大学での授業・研究・部活動・社会貢献事業が継続できた「宝物」でありました。
現在、大学を取り巻く環境は内外とも大変厳しい状況ですが、教職員の底力を信じ、一枚岩になり難局を突破しながら一歩一歩前進するものと確信しています。
最後に皆様の益々のご多幸と大学の更なる発展を祈念しています。

仙台大学での12年間

教授　渡邊　康男

12年間の仙台大学での教員生活でした。教職関係，主に特別支援教育を担当いたしました。前半は特殊教育から特別支援教育へと大きな転換が緒についてばかりのころで，「特別支援とは」「発達障害って?」とか夢中になって授業をしていたように思います。教員採用試験の対策にも関わらせていただきました。
「先生，あのね～～ 」赴任して2年目の5月のある日の午後。3人で訪ねてきた学生が，お茶を飲みながら講義の愚痴やら部活のことやら，ひとしきり話をすると，「また来ま～す」と研究室をあとにした。その翌日，別の学生が「この部屋で勉強してもいいですか」と聞いてきた。机の上にノートを広げて何やら勉強する構えだ。
後で聞いてみると，いずれも教員を目指す4年生で，図書館や学食の隅で勉強しているということでした。それから，学生諸君との交流が始まりました。勉強するところがあればと研究室を解放したが，多くは休憩に立ち寄りコーヒーをすすっては愚痴を吐き出していきました。現在は多くが教員として活躍している先輩諸氏の若かりし頃のことです。
先生方や事務の方々の理解を得て，B棟2階に「教職支援コーナー」が許可され，学生たちの自主学習のスペースが設けられるようになった。今では教職支援室として教職関係の窓口となっています。これからも多くの学生諸君を支える場となっていくことを祈念します。
後半は教材のデジタル化に向けた取り組みと突然のon-lineの授業の開始に，旧式の頭脳が振り回され青色吐息でした。具体に教室での授業のイメージの少ない学生さんにいかにしてイメージをさせられるか。難問でした。結局，on-line，リアルタイム方式でペンタブを利用して仮想の黒板を使っての授業に挑戦しました。
いつも授業で学生諸君に言っていた「頭は柔らかく?」実践は難しいものです。
仙台大学の益々のご発展をご祈念申し上げます。ありがとうございました。

「5年間お世話になった仙台大学を“卒業”するにあたって思うこと」

教授　佐々木　鉄男

テレビ局での実務経験を生かして学生の教育に当たるつもりで5年前仙台大学に来た。しかし、そのときすでに学生の関心事はテレビにはなく、メディアとしてのインターネット、YouTube、そしてSNSだった。当時から卒論のテーマも「テレビの視聴率低下の原因」「インターネットが次のメディアの主流になりうるか」といったものが中心であった。テレビに携わっていた時代から薄々感じていたことでもあったが、学生はもっと先を行っていた。
2005年にライブドアの堀江貴文と楽天の三木谷浩史が相次いで東京のキー局を手中に収めようとしたとき、ヒルズ族、IT長者からジャーナリズムの砦を守りぬかなければと本気で思っていた。あのときもし別の選択をしていたらテレビはその後どんな道を歩んだのだろうか。

2月24日、ロシアがウクライナに侵攻し世界に衝撃が走る。誰がどう見てもロシアに正義はなく、プーチンは戦争犯罪人だ。侵攻から1ヵ月、ウクライナのゼレンスキー大統領の日本の国会での演説が共感を呼んでいる。テレビで流れる戦闘と犠牲者の生々しい映像の多くはSNSを通して伝えられたものだ。映像は人々の心を揺り動かし、世界各地で戦争反対の声があがる。SNSはこれまでテレビや新聞が担ってきたメディアとしての役割を一定程度果たしているといえる。しかし一方で、やはり危険な一面も姿を現す。AIによって作成された偽のゼレンスキー大統領が「降伏」を呼びかける動画などいわゆるフェイクニュースだ。SNSとどう向き合うのか、課題は尽きない。
ところで、ウクライナ侵攻は北京冬季五輪とパラリンピックの間にはじまり、パラリンピック開催中に拡大した。北京冬季五輪ではロシアは国家として参加できない「ROC」にも関わらず習近平はプーチンを開会式に呼んだ。パラリンピックではロシア選手と、進攻に加担しているベラルーシの選手の出場も見送られた。プーチンは平和の祭典としての五輪を冒とくした。スポーツに関係するすべての人々、組織はもっとロシアに抗議の声を上げるべきではないか。

4年前のちょうど今頃、妻と二人でロシアを旅していた。エルミタージュ美術館やサンクト・ペテルブルグの街を散策することがもうできないと思うと残念でならない。

充実と若返りの7年間

教授　田中　政孝

私は、警察を定年退職後、一般社団法人宮城県警備業協会勤務を経て仙台大学にお世話になりました。大学では現代武道学科に所属し、非常勤講師2年、特任講師5年の計7年間、主に社会の安全・安心に貢献する人材育成に関する実技系科目を担当してきました。また、警察官等の公安職系公務員の採用試験対策にも携わり、学科を超えて学生と交流を持つことが出来ました。はじめは大学の教員ということで戸惑いや不安もありましたが、日々の学生との触れ合いは、心身の躍動を生み、忘れかけていた熱血漢を呼び起こしてくれ、楽しく、充実した毎日を過ごすことが出来ました。

実は、私は警察人生の大半を警察学校や警察本部で射撃や逮捕術、教練、体力検定などの警察術科という実技指導を担当しておりました。大学に来て、学生とともに声を出し、汗を流し、向き合ううちに私の中に蘇るものがあったのです。

勿論、新たな経験も多くありました。特に新型コロナウイルスの蔓延に伴うオンライン授業の導入は未知の経験でした。グーグルクラスルーム？オンデマンド？ｍｅｅｔ？などなど聞きなれない単語ばかりで、アナログ爺は右往左往でしたが、新しいものへの挑戦はとても新鮮でした。操作がわからなくなるたびに、若い先生方にご教授を頂きました。ご自分のこともあったのに快く対応していたことには感謝しかありません。
嬉しかったことは、多くの後輩が誕生したことです。毎日、研究室で問題集を解いた学生、小論文で何回駄目だしされても挫けなかった学生、面接指導で泣きながら頑張った学生、3度目の挑戦で合格した卒業生など、夢を叶えてくれたことです。

多くの人々との出会いと経験、そして、学生との絆は私の宝物であり、若返りの妙薬でした。まさに、「若さとは心の状態である」ことを実感し、充実した年間でした。

最後に、仙台大学の益々のご繁栄と教職員皆様のご健勝をご祈念申し上げます。ありがとうございました。

＜仙台大学学術会運営委員会＞